

ムラのミライ 活動レポート & ニュース

2018
3

CONTENTS

- Report 1** 農業で食べていけなくなった理由とは？
前川香子 ムラのミライ事務局次長／海外事業チーフ
菊地綾乃 ムラのミライ海外事業コーディネーター
- Report 2** 「分かり合う」から「助け合う」未来へ
原 康子 ムラのミライ 認定トレーナー
- Report 3** 「支援する人」「される人」の目に見えない人間関係を取り払う
坂本達也 メタファシリテーション基礎講座修了生
- Data** 2017年度 講師・専門家派遣実績
- Report 4** 世界初の地域計画づくりをしてみましょう、と講師は言った
宮下和佳 ムラのミライ専務理事



認定NPO法人 ムラのミライ

高山事務所 〒506-0032 岐阜県高山市千島町900-1 飛騨・世界生活文化センター内
電話 0577-33-4097 Fax 0577-34-5671

関西事務所 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F
電話/ Fax 0798-31-7940

E-mail info@muranomirai.org ウェブサイト <http://muranomirai.org/>



農業で食べていけなくなった理由とは？

前川香子（ムラのミライ事務局次長／海外事業チーフ）

菊地綾乃（ムラのミライ海外事業コーディネーター）

「僕たちの村には、十分な水がありません。なので、水を貯めるとか節水するとかは、ムリです」

2017年2月、セネガルの村で初めて研修した時に村の青年が言った言葉です。その言葉を聞いた和田（※1）が尋ねました。

「どれだけの水があるのか、あなたは知っているのか？」

村人から「十分な水がない」と聞いて、たとえば「十分な水がないなら、井戸をつくってみませんか？」と提案し、実行していくのは妥当な解決方法にも見えます。しかし、本当に「水がない」ことが問題だったのでしょうか？「どれだけの水があるのか、あなたは知っているのか？」という問いかけこそが、目先の現象だけにとらわれることを回避し、問題の根源に迫っていくことを可能にするのです。

冒頭のやり取りから1年、これまでにセネガルの村でどんなことが起こったかを紹介します。

「農業で食べていきたい」村人の思い

アフリカ大陸の一番西に位置する国、セネガル。首都ダカールから南東に150キロほど下ったところにあるンブール県で、2017年2月から事業を開始しました。事業を始める前に実施した調査では、十分な農作物の収穫が見込めない農家たちが、都市部や海外に出稼ぎに行っていることがわかりました。その一方で、農家たちから「出稼ぎに行くことなく、村での農業で食べていけるようになりたい」という思いも聞かれました。年間降水量が600～800ミリとやや少なく（※2）、土壌の劣化が進んだこの土地で、水や土壌を保全しながら農業に活用していける農家を育成することが、この事業の目的です。

共に事業を進めていくのは、JICA（国際協力機構）と現地のNGO「Intermondes（アンテルモンド）」、そしてンブール県ンゲニエヌ行政村の3か村（ンディアンダ村、ンディエマーヌ村、バガナ村）の農家たちです。



食べていける農業って何だろう？

この地域には遊牧民と農耕民が住んでおり、遊牧民も農業を営んでいます。これまでに何度か欧米諸国による農業支援もおこなわれてきましたが、「食べていける農業」が確立しないままでした。ここで、私たちが問いかけるのは「食べていける農業」って何だろう？ということです。

灌漑設備もなく、土壌が劣化し、農業生産性が低い中で、「なんとかしなきゃ」という思いは強くとも、ゴールがクリアにならないと、実行に移せません。そして、そもそも「食べていけない農業」である現在の状況を知ることなしには、変える方法もわかりません。

そこで、この事業では、村の青年農家たちと一緒に、村や農業に関する現状を知ることからスタートしました。

水と土はどのような働きをして、今はどんな状態か？

事業1年目は、2017年2月、5月、9月と2018年1月の4回にわたって、和田、中田による研修を実施しました。

冒頭で「水が十分でない」と言っていた青年たちに、研修講師の和田と中田が、発芽や植物が水を吸い上げる仕組みを細かく問いかけていきます。こうした問いの積み重ねは、子どもの時から親の手伝いで農作業をしてきた青年たちが、何を知っていて何を知らないのか、何に気づかなければならないのか、それらをムラのミライ、アンテルモンド、そして青年たち自身で共有し合う過程となるのです。



同じ池のようすを雨季の9月（上）、乾季の12月（下）に撮影。

事業地の村では、7月から9月頃までの雨季に農繁期を迎え、10月から6月までが乾季となります。

研修開始の2月はちょうど乾季にあたる時期ですが、農作物への水やりは必要です。

研修とあわせて、実際に村を歩きながら、土のようすも観察しました。長年の土壌の使い方により少しずつ質が悪くなり、水を蓄える機能が弱っていること、それにより雨水が土に浸み込まずに流れ、表土も流されてしまったことが見えてきました。また、土壌が塩化（※3）し、農業に向かない土へ変化してしまったこともわかってきました。

※1 和田＝和田信明（ムラのミライ設立者。専門家として本事業に参加）。中田＝中田豊一（ムラのミライ代表理事、プロジェクトマネージャーとして本事業に参加。）。二人はメタファシリテーション手法の生みの親。

※2 気象庁によると、たとえば、東京の降水量（平年値）は約1,500ミリ。

出典：http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/etrn/view/nml_sfc_ym.php?prec_no=44&block_no=47662

※3 土壌の塩化は、多量の化学肥料を使うことや、土の中にミネラルが残留することで起こり、これにより農作物の収穫が激減します。

研修の後、各村では研修に参加した青年たちと農家が集まり、水と土の保全対策のための集会を開催しました。集会では、青年たちが研修を通して学んだこと、つまり土が水を蓄える機能が弱っていること、土壌が塩化していることを他の村人に説明し、土と水を保全するための対策を提案しました。

その話を聞いていた村長が

「確かに以前は、村に木も草も水もあったのに、変わってしまった。みんなの村だから、みんなできり組まなければいけない問題だ」

と語りました。

集会の後、さっそく村の農家たちが自分たちの畑で対策を試みました。雨水の流れを遅くすることで水が土に浸み込みやすくなるように、畑の周りを生け垣で囲ったり、地面を藁や草で覆ったり、土や石で小さな土手を作ったり。小さな取り組みかもしれませんが、それでも「何もなかった時に比べて水が保っている」と変化に気づいた

農家もいました。援助団体のスタッフに言われたからするのではなく、自分たちでこのような気づきと実践を重ねていくことが、研修の大切な要素なのです。

自分の農業のやり方をふりかえる

2017年9月には、作物栽培に関する内容の研修を実施しました。ここでもやはり事実を確認する作業から入りました。青年たちは、まず自分たちが過去数年間に栽培した農作物の種類を思い出して記録していきました。

Aさん：ピーマン、ナス、ピーマン・・・

Bさん：稗、稗、稗・・・

Cさん：キュウリ、落花生、スイカ・・・

同じ「科」に属する農作物を同じ場所で続けて栽培することで、土の中の栄養素が偏ったり、病気や害虫の被害を受けやすくなってしまふことを

「連作障害」と呼びます。青年たちがそれを知っているのかどうかを検証するために、どのように



写真（上）：村での集会の様子

写真（右）：過去5年間で植えた農作物を書き出すワークショップ

UKOPE (2)

Reconnaitre les produits de ces champs selon la famille à laquelle ils appartiennent. Produits et Temps de Jachère

① Monoculture: Mil + Maïs + Sorgo (algomon) + Gambou (cornille)

Jachère par 1 an: #Rachide + Manioc + Nèbe (2 ans)

Jachère par 3 ans: Manioc (nèbe) + pomme de terre (koki)

Jachère par 5 ans: Piment, pastèque, polvrom, #ubengine, tomate, jahatut

15 produits (+ 2 variétés) / 11 ans

Nom de Famille	Produits cultivés ces 5 dernières années
Euphorbiacées	Manioc
Liliacées	algomon
Fabacées	Manioc + #Rachides + Nèbe
Malva	Gambou + bésap (cornille)
Graminacées	Maïs + Sorgo + Mil
Cucurbitacées	Pastèque
Solanacées	Pomme de terre + tomate + #ubengine + piment + polvrom

栽培していたかの洗い出しをしたのでした。
結果、多くの参加者が、同じ科の作物を連続して栽培していることがわかりました。彼らの畑に行き、状況を見せてもらいながら、そこでも事実を確かめていきます。

和田「これは何の畑ですか？」

農民「ナスです。」

和田「いつ植えましたか？」

農民「2017年6月に植えました。」

和田「3か月前ですね。ナスの前には何を植えていましたか？」

農民「ピーマンを植えていました。」

和田「この畑でいくらの収量を見込んでいますか？」

農民「分かりません。栽培量が少なければリスクが多く、多ければリスクが少ないと考えていたので、たくさん植えました。」

そして、これまでのナスの収穫量と投入した肥料の種類や量、農薬などについて問いかけていきました。すると、投入した肥料の量が必要量よりも多かったこと、また、作物の科が重複したことによる連作障害（※4）で出来が良くない可能性があることが明らかになりました。

先ほど「栽培量が多ければリスクが少ないと考えていた」と言っていた青年。どうやら栽培量ではなく、栽培方法に注目しなければならないことに気づいたようでした。

※4 ナスとピーマンは同じナス科に属する農作物



写真：実際に研修参加者の畑を訪問して、作付け状況や農作物の状態を確認していく

農作業にかかるコストを確認する

それまでの研修で学んだことを基礎として、今度は効率のよい栽培計画を立てることが課題として与えられた青年たち。農作物の種類や肥料に考慮した栽培計画を立てるのは、彼らのほとんどが初めて経験することです。

そこで、2018年1月におこなった研修では、本格的な計画を立てる前に、最近植えた農作物の種まきから収穫までの作業工程を書き出してもらいました。さらに、それぞれの工程にかかる費用も計算してもらいます。作業中、青年たちから、「苗

床づくりだけでこんなに費用がかかるのか！」という声があがりました。彼らがこれまで農業にかかる収支の計算をしたことがなかったことが伺えます。だからこそ、一つ一つの工程や費用が理にかなったものだったか、使う肥料や水の量は適切だったか、やはり青年たちとこれまでの経験を振り返りながら、確認していきました。

プロジェクトの現場から 作業を分解してみる

「あなたたちは苗床を作っていると言いましたね？この苗床を作るまでの作業工程を全部、順番に書き出してみてください。使う農具や肥料、水の量、働く人数も全部です。」

と、和田から課題を出された村人たち。あるグループは、「100平方メートルのキャベツ畑で

草取り（5人で30分）、
耕し（5人で30分）、
植替え（5人で30分）、
水やり（5人で30分）、
収穫（5人で30分）」

と発表しました。

しかし、和田から一言。
「植替えが5人で30分とあるけれど、本当に30分で終わるの？」
そこで、実際に計算してみます。

50センチごとに苗を一本植えるとして、全部で400本の苗なので、一人当たり80本の苗を植えることになる。
一本の苗につき、「苗を運んでくる、土を掘る、植える、土をかける」の動作で2分かかるとして、
80本×2分＝160分
＝2時間40分

一人当たり2時間以上かかる計算になりました。想定していた30分とはだいぶ違いいます。こんな風に具体的に考えていくと、必要な時間や道具や人数がハッキリとしてきます。極めつけに出された課題は、「それぞれの工程にかかる費用を出す」というもの。

この課題に取り組んだ農民たちからは、「最初の苗床作りだけで、こんなに費用がかかるのか！」という声が聞こえてきます。それもそのはず。農民たちはこんな作業をほとんどしたことがなかった

のです。
「私たちはただただ働いてきましたけど、こんな事はなにも考えずに働いていたんですね。」



経験は大事。だけど、経験を分析することが必要

こうして約1年をかけて、村の青年たちが何を
知っていて何を知らないのか、何に気づかなければ
ならないのかを、ムラのミライ、アンテルモンド、
そして青年たち自身で共有していったのでした。
それは同時に、「十分な水がない」と訴える
だけでは見えてこない、「なぜ、農業で食べてい
けなくなったのか」を青年たち自身が気づく過程
でもありました。

子どもの時から親の農業を手伝ってきた彼らで
すが、経験が長いからといって、農業に関するこ

とをすべて正確に知っているとは限りません。経験
に基づく行動が、彼らを取り巻く環境やその変化
に合っているのかどうか、それを「教えてもら
う」のではなく「自ら分析し、発見していく」こ
とが、ムラのミライのやり方です。

研修に参加している青年の一人が、ある日、こ
んなことを言いました。

「僕は、学校教育を受けました。だけど、今ま
で、まるで無学の人のような働き方をしてきた、
ということに気づきました。今やっと、毎日何を
すべきなのかが分かりました！」

プロジェクトとパートナーについて

プロジェクト名：地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト～農村青年層のための「ファーマーズ・スクール」

草の根技術協力事業（パートナー型）としてのJICAとの協働は、2004年の南インドのスラムの女性たちによる信用金庫の事業から、地域や国を変えて続いてきました。Intermondesの代表ママドゥ氏は、西アフリカで最大の老舗NGOといわれるEnda-Graf（1996年設立）の元主要メンバーで、そこから派生・独立して、2011年にIntermondesが設立されました。



「分かり合う」から 「助け合う」未来へ

原康子（ムラのミライ認定トレーナー）



～愛情があればわかり合えるはず（中略）愛情がなければどうしようもないが、それがうまく伝わらないなら、ないも同じです～

これは『対話型ファシリテーションの手ほどき』の「まえがき」からの抜粋です。まずは身近な家族に対して「愛情がないも同じ」になってしまわないよう、親や子育てに関わる方たちを対象にメタファシリテーションを紹介する講座を始めて1年が過ぎました。

分かり合えなくてしんどい

2017年度は、西宮市で3回（7月、10月、2018年2月）の講座を開催し、65名に参加していただきました。まずは、講座に参加された方から寄せられた、子育てに関する悩みの一部をご紹介します。

●子どもが学校での出来事をちっとも話してくれない。周りのお母さんたちに聞くと、話してくれる子がうらやましい。自分の子は問題児だと感じていたし、話さないタイプだと思っていた。

●子どもやパートナーに「あれをやっておいて」「あれをこうしておいて」、というざっくりとした指示が多いと思う。これらの指示の背後には「○○くらいしてくれたら、いいのに」という言葉には出てない気持ちが隠れている。

「もっと子どものことを知りたい」「パートナー/子どもに○○して欲しい」「本当は○○した



講座ちらし

いの、出来ない」という気持ちが、身近な相手にちゃんと伝えられず、分かり合えなくてしんどいという声が聞こえてきます。

これらの講座は、ア・リトルという地元の女性グループとともに企画しました。広報用のちらしには、「つながり合う」「助け合う」という言葉がキーワードになっていますが、ア・リトルは、このキーワードを探すところから一緒に講座づくりを担ってくれました。

ア・リトルは、2015年に西宮市在住の子育て中の5人の女性によって設立され、産前産後の家事援助や子どもの一時預かり、親子カフェ、ヨガイベントなど、女性がちょっと一息できるような集い・学び・助け合いの場づくりを主な活動としています。

ア・リトルと一緒に子育てをテーマにしたメタファシリテーション講座を開催するようになったきっかけは、2017年6月、ア・リトルの中心メンバーに「メタファシリテーション」を知ってもらいミニ講座を実施したことでした。講座後、早速、子どもとの対話にメタファシリテーションを使ってみた、というメンバーたち。これは、ぜひア・リトルの会員や他の西宮で子育てをしている人たちにもメタファシリテーション技術を伝えたいということになり、3回の講座を一緒に企画することになったのでした。これまでなかなか実現しなかった「託児つき」の講座が、ア・リトルと一緒に企画したことで、やっと実現できたこともこの3回の講座の特徴でした。

助け合えない暮らし

ア・リトルの皆さんと話し合ったキーワード「助け合う子育て」の背景には、マタニティハラスメント、産後うつ、産後クライシス、ワンオペ育児、待機児童、乳幼児虐待、単身赴任、長時間労働、転入先（西宮市）での孤独な生活など、深刻な「助け合えない」子育て事情があります。

これらは一見、妊婦や子どものいる家庭だけに降りかかってくるように見えますが、実はそうではありません。子どものいる人も、いない人も、「私は毎日、誰かと助け合って暮らしている」と言える人はどれだけいるのでしょうか。誰かと助け合う必要のない暮らしは、目の前にいる相手とのコミュニケーションの時間がほとんどない暮らしです。誰かとの助け合いやコミュニケーションに代わって私たちの暮らしに根を下ろしたスマホ、パソコン、テレビ、自動〇〇機などの機械たち。今朝起きてから、今までに、誰かと話した時間と、スマホをはじめとする機械を見ていた時間とどちらが長かったか、ちょっと思い出してみてください。

聞かれ方ひとつで答えが違う！

一方的に用事を入力するだけで済む機械たちとは異なり、相手と直にやりとりするコミュニケーションは、言葉や表情、身振りなどで、お互いに意思や感情、気持ちを伝え合う双方向のものです。目の前にいる相手に言いたいことがうまく伝わらない、会話がちっとも続かない、相手のちょっとした発言で傷ついてしまったり、



ア・リトルの活動



ミニ講座の様子（2017年6月）

相手を怒らせてしまいます。コミュニケーションは、普段から「意識して」使っていないと、どんどん使えなくなってきました。

この「意識して」の部分で、メタファシリテーション手法を使ってもらえたら、ほんの少し、投げかけ方が変わります。そうすれば、今度は相手も変わってゆき、双方向のコミュニケーションがどんどん楽になってゆきます。以下は、講座後に参加者から寄せられたコメントです。

●私が子どもにした質問で答えが返ってこないことがあった。講座を受けて、私の投げかけ方が悪かったことに気づいた。子どもにプレッシャーをかけるような試験のことから話しかけるべきでなかったと思った。

●返事をしない夫に感情的になってしまうことが多かったが、これからもっと具体的に事実を聞いてゆこうと思う。

●子どもに対する「なぜ〇〇したの？」や「どうだった？」という数々の投げかけが、子どもの自己肯定感を低くしていたことに気づいた。

●聞かれ方ひとつで、答える方はずっと話しやすくなることが分かった。これからは、そんな話し方を心がけたい。

身近な相手との「分かり合う」が「助け合う」の第一歩

これらは小さな変化かもしれませんが、毎日の身近な相手との「分かり合う」が、「助け合う」未来に近づいてゆきます。「どんな子育てをしたいか？」というのは、「どんな未来を創りたいのか？」に直結するのです。まずは身近な人同士で助け合える社会に向けて、大きな一歩を踏み出したと感じることのできる西宮での講座でした。

2018年4月からは「もっとメタファシリテーションを使えるようになりたい！」というこの3回の講座参加者の皆さんを中心に、ステップアップ講座を予定しています。

今後もア・リトルと一緒に西宮市で、そして他の地域で、子育て支援に関わる皆さんと一緒に「子育て」にメタファシリテーションを取り入れた実践的な事例を紹介しながら、講座を続けてゆく予定です。「私のまちで講座を！」と開催をご希望される方がおられましたら、お気軽に事務局までご連絡ください。



子育て世代や関心を持つ方に向けての講座（2018年2月）

「支援する人」「される人」の 目に見えない人間関係を取り払う

坂本達也（メタファシリテーション基礎講座修了生）

途上国の人々にとって、本当に有益なことは何だろう？

この記事の読者の皆さまは、青年海外協力隊という言葉聞いて、やる気に満ちた若者を想像されると思います。しかしながら、私が長野県の駒ヶ根市にある、青年海外協力隊の訓練所で出会った約150名の協力隊の候補である訓練生の多くは、「実際に自分が隊員として任国へ派遣されて、私に何が出来るのだろうか」又は、「途上国の人々にとって、本当に有益な事とは何だろう」と悩んでいました。

私自身も青年海外協力隊の試験を受験する前に、研修生の悩みと似たようなものを抱えた経験があります。私は、その悩みを解決するために、国際協力に関係する書籍を出来るだけ多く読みました。その書籍の多くは、難しい理論が書いてあったり、「発展途上国」という、日本人から見ても未開の国を、日本人視点で考察したものが多く、国際協力に携わったことの無い私にとって、これらの書籍はとて難しく感じました。

私は、自動車整備士として国内外を合わせて10年ほど働いた経験があります。青年海外協力隊として、私が得た技術や知識を途上国の方々に伝えることは、「日本の企業が発展途上国での市場開拓を促進するだけなのではないか」「途上国の方々の利益にならないばかりでなく、途上国に格差を広げるだけなのではないか」と真剣に悩んでおりました。

途上国が抱えている問題とは、途上国の人々が作ったものではなくて、外部の人々が、問題を作っているだけに過ぎないのではないかと。その経緯から、ますます「青年海外協力隊に応募をする事の意味」と、「本当に人々の利益の為に活動する事はこういった事なのか」について悩む事になったのです。

メタファシリテーション手法との出会い

そんななか、「対話を通して人々に気づきを促し、気がついた人達の自主性で問題を探し、解決する」メタファシリテーション手法に出会いました。この出会いから、私が途上国で活動する

坂本達也（さかもと たつや）

日本の自動車販売ディーラーの自動車整備士として働き、日本の自動車修理の現場では、壊れた物は修理をせずに取り替える作業が主流で、日本では技術を得る事ができないと判断し、自動車整備士としてニュージーランドへ渡り、ニュージーランドの自動車整備工場で働く。

その後、青年海外協力隊へ応募し、青年海外協力隊の2017年度3次隊の隊員として、ブータンの職業訓練校の講師として活動中。

事への悩みは薄れ、さらに、ムラのみライの書籍や講座を通して、私が海外で、人々のために働く事の意義を見つける事が出来たのです。

日本では自動車の整備に掛けられる時間が減った上に、昨今の自動車は修理よりも故障部品の交換が利益の中心となった為、技術の継承が難しくなり、働く意義を失っていました。一方で、途上国での自動車は、修理さえ出来れば長く使ってもらえます。途上国で自動車が長く使用できるように技術移転をする事で、自動車整備士の仕事が長くできるようにしたいと、青年海外協力隊に応募することを決めました。そして、メタファシリテーション手法を使った対話の中では、「支援する人」「支援される人」という関係は発生しません。この手法を活用し、現地の人々の気づきを促しながら技術移転をしたいと考えるようになりました。

自主講座を開催！

青年海外協力隊の訓練所では、訓練生が、自身の職業の経験と知識を生かして自主的に講座を開くことができます。そこで私は、メタファシリテーション手法の自主講座を、同期の訓練生に行いました。講座のなかで、「今日は何故、私の自主講座に来て下さったのですか？」という、あえて返答の難しい質問を問いかけて、質問を受けた訓練生が直ぐに返答のできない状況を作りだしました。これは、参加者に、私の質問への返答を考えさせる事が目的でした。「なぜ」「どうして」といった種類の質問が、「返答する人が、質問した側の人にとって聞こえが良い返答を、その瞬間に考えてしまう」という仕組みを理解して頂くためです。さらに、上記の例をもとに、質問をした相手に「考えさせる事」と「思い出させる事」は大きく異なるという事を説明しました。事実質問をすることで、過去の習慣と現在の習慣を思い出させて、その二つの習慣の違いを比較させる事が、気づきに繋がると伝えました。



「待つ」ことの難しさを実感

自主講座で伝えたかったのは、「問題や課題を発見したり、それに気がついた人は、自ら行動を起こす。だからこそ相手に気づきを促す事が大切」ということでした。しかし、自主講座の時間が限られていたため、私自身が、参加者が答えに気が付くまで待つことができませんでした。参加者が答えに自分で気づく機会を奪ってしまったため、一番伝えたかった気づきの大切さを理解してもらえなかったのではないかと考えています。このことから、「質問をした相手が何かに気づくまで待つ」ことの大切さをとても痛感した講座となりました。

相手に寄り添いながら

メタファシリテーションの手法は、シンプルな質問を積み上げて相手に気づきを促す手法です。この手法を練習していく過程で、人とコミュニケーションを取る上で大切である、「訊く事」と「聴く事」を相手に寄り添いながら出来るようになります。

実際に、私が青年海外協力隊員としてブータンに派遣されてからは、現地の人と対話をする際に、「支援する人」と「支援される人」といった、目には見えない人間関係が待っているでしょう。しかしながら、メタファシリテーション手法を使うことで、このような目には見えない人間関係を取り払い、日本と、他の国に住む方の皆さんにとって、有益な活動を行う事に繋がると信じています。

写真：ブータンでの同僚へのプレゼンテーションをおこなう坂本さん（左）とワークショップのようす（右）



2017年度 講師・専門家派遣実績

大学の講義やスタッフ向け研修などに、ムラのミライスタッフや認定講師を派遣しました。

講義、講座、セミナーへの派遣

甲南女子大学、京都大学大学院総合生存学館、
青年海外協力隊員有志（インド）、北陸先端科学技術大学院大学、
（株）アースアンドヒューマンコーポレーション、
（公財）日本障害者リハビリテーション協会（日本、カンボジア、台湾）、
お茶の水女子大学、（公社）大阪社会福祉士会北河内支部、
あおもり地球市民ネット、近未来くらしかた研究会、アスモ（株）、
子育てネットワーク西宮、三重県立看護大学、東京女子大学、
（公財）日本国際協力財団（日本、バングラデシュ）、（特活）IVY、
広島大学大学院、北海道大学公共政策大学院、中京大学、
弘前大学大学院、（公財）名古屋国際センター

インドからも、 コンサルタントを派遣

いつ：2017年11月
どこで：バングラデシュ
誰からの依頼で：（公財）日本国際協力財団
講師：M. Ramaraju

（公財）日本国際協力財団が実施している事業の現地スタッフ等約20名を対象に、座学とフィールドを組み合わせた、4日間のメタファシリテーション基礎講座を実施しました。
2004年から2014年まで、ムラのミライのインドでのプロジェクトに関わってきた、現ムラのミライ契約コンサルタントのM. Ramarajuさんを派遣。「事業で使っていきたい」というコメントのほか、「日常生活にも使えそう!」という声も。ムラのミライがインドの農村で実施したマイクロ・ウォーターシェッド事業にも関心が寄せられました。

フィールドワークの 事前準備に

いつ：2017年12月
どこで：北海道札幌市
誰からの依頼で：北海道大学公共政策大学院
講師：宮下和佳

講義「グローバリゼーション研究会」の一コマで、30人程度の学生を対象に、メタファシリテーションをテーマにした講義を実施しました。本講義はフィールドワークの事前学習としても活用され、講義に参加した学生が、2018年2月に開催した「コミュニティ・ファシリテーター研修 in 南インド はじめてのフィールドワーク」に参加しました。

プロジェクト（調査含む）への専門家派遣

（特活）AMDA-MINDS（ミャンマー）
NTCインターナショナル（株）（イラク・ヨルダン）
JICA南アジア部（ヒマーチャル・プラデシュ州）

講師・専門家派遣のお問い合わせは

この他にも、場所、テーマ、予算など、ご依頼内容に合った講師・専門家を派遣します。

お問い合わせはムラのミライのウェブサイトから。

●ウェブサイト

<http://muranomirai.org/dispatchrequest>



座学＋フィールドで じっくり取り組む

いつ：2017年7月、2018年2月、3月

どこで：日本（東京都）、カンボジア、台湾

誰からの依頼で：

（公財）日本障害者リハビリテーション協会

講師：原康子、前川香子

過去に（公財）日本障害者リハビリテーション協会が実施した研修の参加者へのフォローアップ事業です。2017年7月に日本でメタファシリテーション手法を学ぶワークショップを実施。2018年2月と3月にはフォローアップのために再度ワークショップ参加者を訪問します。

これまでとは全く異なるインタビュー手法＝メタファシリテーションに驚いた障害者リーダーたち。その技を学ぶべくワークショップに参加しました。ワークショップでは、誰が、どこで、何を…を明らかにするアクション・プランづくりにも取り組み「周りに共有したつもりでもできていなかった」「話し合っているとこういうことなんだ」というコメントが寄せられました。1回だけでなく、長期に継続して取り組んでもらうことで、確かなスキルになることを期待しています。

医療・介護分野でも活用

いつ：2017年9月

どこで：青森県青森市

誰からの依頼で：近未来くらしかた研究会

講師：中田豊一

ムラのミライの講座に参加した医師が、「医療・介護分野でもメタファシリテーション手法が応用できるのでは」と、医療・介護に携わる人々を対象とした講座を企画・実施しました。医療・介護に関わるトピックも取り上げたため、内容を絞り込み、要点をおさえた講座となりました。

医療・介護に携わる方々の実践により、メタファシリテーション手法が途上国の地域づくりの現場だけではなく、医療・福祉の分野でも役に立つことがわかりました。



Report 4 名護・コミュニティファシリテーター育成研修

世界初の地域計画づくりを やってみましょう、と講師は言った

宮下和佳（ムラのミライ専務理事）

2017年4月から、「コミュニティファシリテーターを育てる実践研修～メタファシリテーションを用いた、住民主体による地域づくり～」と名づけた連続型の研修を沖縄県名護市の東海岸で実施しています。4泊5日の研修を数か月おきに4回実施するというものです。

全国から集まった16名の研修生は、NPOや企業など様々な形で海外・国内の地域づくりに携わる方々。名護市の地域おこし支援員の方々も加わり、総勢21名の研修生です。

地域を歩く。観察する。出会った方にお話を聞く。夜は夜で、民泊（ホームステイ）先のお家の方にまたまたお話を聞く。そうして研修生が見つけたことへの発表に、講師がコメントする・・・シンプルな繰り返しの中で、少しずつ見えてきたことは？

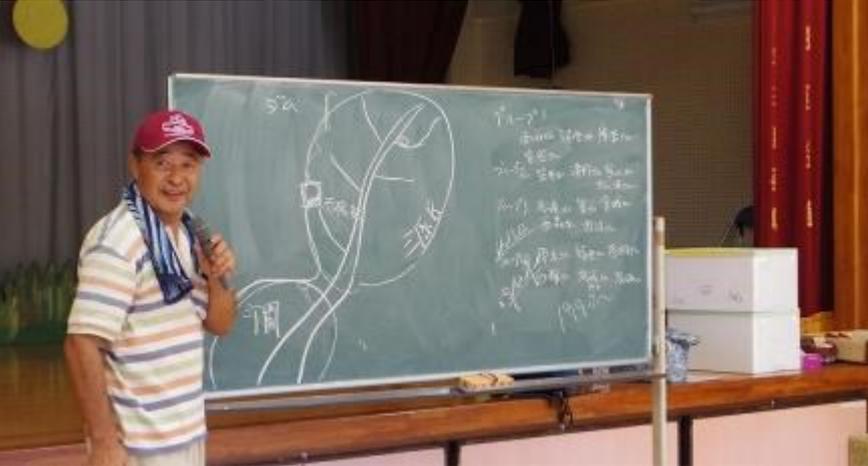
地域の記憶を掘り起こす

第1回研修のフィールドワークで見つけたことを、時間軸・空間軸の2軸でまとめたことで、地域の変化が立体的に浮かび上がってくる瞬間がありました。

研修生：1970年ごろまで、ゆいまーる（共同作業、互助）があった。米やサトウキビを作っていた頃は助け合いながらやっていた。主な作物がウコンとなつてからはそれが不要となり、他の家に行くことがなくなった。

講師：つまり、必要がなくなったから助け合いがなくなったということ。昔の農作業では共同作業が必要だった。たとえば稲作では田植え、稲刈り、どちらも日を決めて近所の人に来てもらってやった。

助け合いがなくなった結果としてコミュニティが崩壊したわけで、「（ある地域ではコミュニティや家族を大切にするが）そういう結びつきがなくなったところはコミュニティや家族を大切にしていないのだ」と



ということではない。私たちが“一人で生活できる仕組み”を作った結果、一人ひとりが孤立してしまった。精神論や文化論の問題ではない。ただ、政策の問題ではある。そのあたりをきちっと切り分けるためにも、質問することで変化のプロセスを具体的に明らかにしていく意味がある。

主要な農作物が変わったことで農作業の方法が変わり、人と人との結びつき方が変わり・・・という地域の暮らしの変遷が、お一人お一人への具体的な聞き取りから浮かび上がってきました。

そして第2回、2017年8月の研修では、汀間（ていま）川流域へ。地域を訪れる前に、講師からフィールドワークのお題が提示されました。

私たちは、いきあたりばつりに変化してきた

それは、「自分がここに住むとしたらどう集落を形成していくかという視点をもって臨んでください」という指示でした。この視点を持って汀間川流域を歩く。そして、汀間川流域という入れ物

の中でどんな暮らしができるだろう、と考える。

「ここで暮らすとしたら、どんな暮らしをする？」「どんな展望に基づいて、どんなものを築いていく？」と。

講師：この条件で、新たに生活を築いていくとしたら、何をイメージするのか？どういう情報を知ればいいのか？どういう技術を身につければいいのか？抽象的な“過疎高齢の地域”ではなく、あなたが“ここ”で暮らしていくとしたら、どういう生活を築いていくか、その器＝物理的な場所として、汀間川流域を見てください。生活を築くというのは、食べ物、寝る場所の確保・・・ひとつひとつ。

“どういう生活を築いていくか”ということをもまず考え、それにしたがって周りの環境をどう変えようか・・・とやったところはない。地域社会、市町村レベル、県レベル、国レベル、世界のどこを見渡してもない。



残念ながら。何の根拠もない「〇〇市総合計画」ではなく、我々の日常の生活感覚でどういう生活を組み立てていくか。私がこういう生活をしていきたいから、生活圏をこういう状態にしていきたい、ということから計画を積み上げていく。そういう風には、残念ながら誰も考えていないということです。この作業をすることで、皆さんがひょっとしたら世界ではじめてそういうことをやるヒトになるんですよ。スゴイですね。

地域計画を、「積み上げ」方式でつくる

私自身の日常をふりかえっても、確かに、様々なできごとに対応して、いわば「いきあたりばったり」「その場しのぎ」的に、少しずつ生活を変化させています。その集積が、地域の変化、社会の変化をつくってきたというのは、にわかに受け入れがたい視点です。だって、もうちょっと私は（私たちは）賢くて思慮深いかな、と思いたいですから。

研修生：「生活を築くために環境を変えたことはない」と言われたが、人間は農業をするために土地を切り開いてきた。つまり、周りの環境を人間の生活が変えてきたのでは？

講師：「環境を変えたことがない」のではなく、「こういう社会を築きたいからこうするんだというふうに計画をしたことは一度もない」ということ。個人が畑を広げました、集まって村を作りました・・・結果論から言うと、ずっといきあたりばったり。それでよかった。（地球には）それだけのキャパシティがあった。

でも、これからはどうか。たとえばインドの人口は現在14億。20世紀の始めは3億人。つまり、この100年強で4倍。一方で、このように人が減っているところがある。人口が爆発的に増えたことと過疎とはコインの裏表。この、我々が直面している条件はとても厳しい。けれど、今後なにをするにしても、何とかこの条件で、どういう社会



を作っていきたいか考えなければならない。この研修の「考える」は、常に具体的にディテールを考えるとこと。ディテールを考えると時、自分の生活以外の出発点はない。

“自分の生活”を出発点として、地域計画を、“積み上げ”方式でつくる。でも、自分の生活を具体的に考えるって、どうしたらいいの？何を積み上げるの？

それは、私の生活の中のひとつひとつの事象を事実質問で思い出してみることから始まりました。たとえば・・・今朝は7時に起きて、まず顔を洗って歯磨きをしました。（そのお水はどこから？）その後は朝の散歩に出かけ、湧き水を汲める場所に向かう途中でシークワサーを摘みました・・・

研修後半の様子は、また次回。



ムラのミライについて

「ない」ことは本当の問題なのか？

認定NPO法人ムラのミライは、1993年に岐阜県高山市で設立されました。設立当初は「インド山村部の貧困層を助けよう」と、識字教室や収入向上活動など、「ない」ものを投入する支援から始まりました。

しかし、さまざまな活動を経て、都市化と市場経済化の進展がコミュニティとコミュニティの維持してきた自然資源やセーフティネットを衰退させ、多くの社会課題を生んでいること、それが海外・日本に共通する構造であることに気づきました。



コミュニティに「ある」ものを引き出し、課題解決を促す

そこで、住民との対話を通じてコミュニティに「ある」もの＝彼らの持つ経験や知識を引き出し、住民自身による課題分析・解決を促す独自の「メタファシリテーション手法」を開発。徹底的に住民主体にこだわり、インド、ネパール、セネガルで、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出していくためのプロジェクトを実施してきました。



地域づくりで、医療で、子育てで

「●●がないから、××ができない」という思い込みをひっくり返し、住民を本気で課題解決に向かわせる力を持つと、高い評価を受けるようになったメタファシリテーション手法。この手法を書籍『途上国の人々の話し方』やムラのミライの理事・職員・認定講師によるセミナー・研修で伝え、住民の行動変化を促すスキルを持つファシリテーターを育成してきました。国際協力分野だけではなく、日本国内での地域づくりや、医療・介護、子育てといった分野で実践する人が増えつつあります。



メタファシリテーション手法とは（団体としての正式な定義）

メタファシリテーション手法とは、ファシリテートする側が当事者に対して事実のみを質問していくことによって、当事者が思い込みに囚われることなく自分の状態を正確に捉え、そのことによって自分の経験知から課題の解決につながる示唆を主体的に得る過程を創り出す手法である。またこの手法は、ファシリテートする側が事実のみを訊くことによって自分が現在何を訊いているのか正確に認知すること、すなわちファシリテートする側のメタ認知（meta cognition）を促し、ファシリテーションの過程そのものの客観性とファシリテートする側と当事者とのコミュニケーションの効果を最大限に担保する。